

(その 168) ある相談者の生き方に寄り添い感激ひとしおでした。

2019年9月発行

秋田で農家の長男として生まれたSさんは、定年後に足のケガで働けなくなり川崎で生活保護を受け簡易宿泊所で生活していました。2011年3・11、管理人とトラブルとなり私(当時市議兼務)に相談にみえました。私の地元の後援会事務所に住んでいただきながら、体調と相談しながら後援会活動にも尽力いただきました。

64歳になってけがも治り、経験を生かし川崎区の大企業の食堂の仕事につき責任者になり5年間働きましたが、今年3月初旬体調を崩して働けなくなり、4月5日入院し治療に専念しましたが7月28日午後、間質性肺炎で永眠されました。最期を悟ったのかマンションの退去手続きをしてと頼まれ7月14日に片付けました。3月に退職した関係で前年度より収入が大幅に減収となるので、国保料と住民税の減免申請し受理されました。7月5日入院している病院の相談員からSさんに任意後見人を付けてと要請され7月12日に公証役場の人に出張してもらい契約して所長がお金の管理と、病院への支払い、葬儀費用も預かりすべて払い終わりました。

秋田の弟妹に連絡したところ3人が川崎に来られ、八丁畷の友人7人も参列し、7月31日故人の希望で直葬を行いました。

病院や葬儀の費用、アパート代等どうしようと困っていたが仲間の皆さんが全て執り行っていたいただき助かりましたと感謝されました。Sさんはすべて計算して必要なお金を準備して誰にも迷惑をかけることなく旅立ってゆきました。ご遺骨は弟さんが持ち帰り秋田で葬儀も行なったと連絡がありました。

しんぶん赤旗のお悔やみ欄を見た富山の大先輩で11期町議を務めた方から、Sさんの喪主が宮原春夫となっていたのを見て「このように奥深く信頼されお世話なされるくらしの相談に感謝の念募るのみです」とのお便りを頂きました。

宮原春夫